出産後自己免疫疾患の発症予測及びその予防法確立に関する研究

多田　尚人

大阪大学医学部生体情報医学

出産後自己免疫性甲状腺疾患についてはスクリーニングから高リスク群のフォローアップまでの総合的なプロトコールを設定実施したが、産科外来で閉じた形では出産後のフォローアップが容易でなく、内科との連携なしには実現し得ないと考えられた。前回出産後重症の破壊性甲状腺中毒症を起こした症例に、今回出産後試験的にステロイドの短期間予防投薬を行うと発症が予防できた(paper in preparation)。他の自己免疫疾患については部分的ながら知見の集積が得られた。慢性関節リウマチでは、女性の発病時期として出産後1年間が他の時期の7～8倍多く、また出産後発症があらかじめリウマチ因子が陽性である例に見られた。産褥心筋症として知られる、しばしば出産後重篤な心不全で発病する病態の中にはおおくの自己免疫性心筋炎症例が含まれると考えられる。実際の症例解析とともに、蛍光抗体法による抗心筋抗体、抗心筋ミオシン抗体、抗心筋トロポミオシン抗体との関わりについて調べたが、これらの抗体は自己免疫性心筋炎以外の心筋障害に引き続く二次的な出現も見られた。自己免疫性肝炎については抗肝腎ミクロソーム抗体1（LKM1）の抗原であるチトクロームP-450 II D6のRadioligand assayによる特異的で高感度な自己抗体測定法の開発を試みた。この方法で自己免疫性肝炎（AIHスコアが10以上）28例、B型慢性肝炎25例、C型慢性肝炎24例、他の全身性自己免疫疾患（慢性関節リウマチ、SLE、MCTD、SSc）27例、健常者50例について血清中の抗P450自己抗体を測定し、自己免疫性肝炎中の15例が陽性（2例強陽性、13例弱陽性）であった。測定値はAIHスコアとは相関がなかった（paper in preparation)。

参考文献

1. Watanabe Y., Tada H., et al. Polyethylene glycol increases He. detection of anti-thyrotropin(TSH) receptor antibodies by radioreceptor assay Clin. Chem., 45:407~409, 1999.
2. Iijima T., Tada H., et al. Prediction of postpartun onset of Rheumatoid arthritis Ann. Rheum. Dis., 57:460~463, 1998.